

双死双哀

B>走狗流歌

これは、言葉と呼ばれる言葉の力が当たり前のように使われる、そんな世界でのお騒がせな双子と軍人さんの愛と火薬がいっぱいつまったお話。ホロリもあるよ。

物語の始まりはチームと呼ばれる問題児収容施設。

言葉の力が強く、この大陸の中心国であるラングアゲ。その隣接国であるニアラにそれはあります。言葉は、その性質から、強力なものほど遣い手に与える影響は大きく、強力な言葉の使い手は時として、理性を失ってしまったり、暴走してしまいます。そんな子達をチームは収容し、矯正しています。一方で、集められた子の中から天才や奇才を見つけて、教育したり言葉の研究に役立てたりもしています。そして、その教育された天才奇才は傭兵として、働きにだされているのです。

ちよっと悪の組織っぽい雰囲気ただよつチームに、今日は二人のお客さん。

「やっぱり、ここ頼りになつちゃうスねえ……」

「あまり関わりたくないが、仕方ないさ」

子供のように唇をとがらせ、不機嫌そつな青年エース。

ため息をついている、大人びた雰囲気青年ジャック。

白を貴重とした軍服に身を包んだ二人が、この物語の主人公です。

二人はニアラとラングアゲの近くにある、警備カレドの国の大陸治安維持軍の軍人さんです。しかし、ただの軍人ではありません。成人式も記憶に新しい若者でありながら、軍のトップに位置するフェイス四隊を任される隊長さんなのです。つまり、エリート

さん。そして、二人は言葉の力、言葉を銃弾に込めて戦つ、言葉遣いでもありました。この世界では一般的な職業です。

そんな言葉遣いを束ねる軍の仕事は、悪口や影口が集まって出来た悪霊のようなそんなさい、悪言を退治することです。

そして、今回、二人に与えられた任務は、巨大悪言の討伐、というものでした。

「しっかし、なんであんなにかい悪言が出たんスかね？」

「ブール辺りはもともと言葉が激みやすい場所だったんだが、多分そんなことも知らない馬鹿どもが罵詈雑言の応酬でもやらかしたんだろっ」

「ほんとそついつのやめて欲しいスよね！ せつかく休みだったのに！」

「休みでも呼び出されるのはエリートの宿命さ」

「全つ然うれしくないッス……」

がつくりと大げさに肩を落とすエースは、目線の先に《傭兵貸し出し受付》と書かれた看板を見つけると、さらにため息をついた。

「はいはい、言葉遣い以外ならなんでもそろつ傭兵貸し出し場ですよ」

そう、ニコニコ笑つ受付嬢はなんと、可愛いくまのぬいぐるみ。なんでも、中に負のエネルギー体である悪言を入れて動かしているんですつて。シニールです。

「ブールに出た巨大悪言の討伐に行くんだが、どうにも我が隊員では心もとない」

「あんま怪我させたくないし、チームさんの力を借りたいつてわけッスよ」

「ほうほう、チームの子共連なら怪我してもいいとはなかなかいい根性してますね！ 分かりました、びつたりの子を探してみましよう」

ニコニコしているけど、言葉はトゲトゲしたくまさんのようつです。

「うーん、そうですね、この子達なんてどうつてしょう？」

器用にファイリングされた書類を捲つていくまさんは、そう言つて一組の双子が映つた写真を見せた。

「うちの自慢の双子、鬨詞くんと純志くんです」

でてきてくださーい、とくまさんが振り返って呼びかけると、目隠し、足かせ手かせで拘束された、十歳くらいの少年がばたばたと二人やってきました。

「うっわあ、あんだ達の組織はホントいい趣味してるっスねえ…」

「お褒めに預かり光栄です、軍人さん。さて、この双子、巨大悪言などちよちよいのちよい、お茶の子さいさい、赤子の手をひねるように消すことが出来ますが…」

そこでくまさんは可愛い顔のまま、真面目な声で、

「しかし、決して目的の悪言が現れるまで、人を引き合わせないでください。それを守れるというのなら、よろこんでお貸しいたします」

そう言って、くまさんはまるで可愛い手を二人に差し出しました。

くまさんのビーズの目は無言のまま訴えていました。

さっさと金だせ。

「あーアー…、だりい」

結局、チームで借りた傭兵双子は、くまさんの忠告に従い、二人が車で別々に連れて行き、仲間が巨大悪言を足止めしているブーオルで合流することになりました。

エース隊が連れて行くのは双子の兄の鬨詞くん。物々しい拘束具をはずされ、身軽になった鬨詞は開口一番、『だりい』。さっそく雲行きが怪しいです。

「オイ！ あんだ傭兵だろ？ こっちは金出して雇ってんスから、そんなことじゃ困るっスよ！ 隊の士気も下がちまうっス！」

そんなやる気ゼロな鬨詞くんはエースさんは必死で訴えます。流石隊長さん！

「んなこと言ってもよー、ダムいらないからやる気でねえし。ぶっちゃけ金なんかイラ

ねエからおうちに返せって話、マジナイわー」

「うわ、むかつく！ 超むかつく！ エース、コイツほこほこにしていっスよ！」

「何で俺がなんですか！？ 隊長が勝手にやってくたさい！」

大人気なかった。しかも職権乱用だった。

「うわあ、部下にあきられてやんの。うっわ、ナイわ。やる気マジ減退したわあ」

「うるせーッ！ 部下に後輩キャラ認定された俺の気持ち分かるかーッ！」

「部下に言われてんの！？ ダッサ、マジで？ 面白い隊長さんだな」

「え、ほ、本当か？ ちょっとうれしいっスね…」

「ハア？ 何照れんの？ いやみに決まってんジャン。あ、そうか馬鹿だもんねー」

「1ツツそおおおてめえええええ！ 超むかつくうっつうっつ！」

十も年下の子供に完全に遊ばれる隊長さん。大人気というものを完全にどこかにおいてきてしまったようです。忘れ物センサーは何処ですか？

そんな隊長さんに、部下達はあきれながらも、

「でもコレが俺達の隊長だよな、フィフス」

「()なんか、()っ、応援したくなるんだよな、隊長って」

なんだかほんわかした雰囲気につつまれていました。ほわん。

…こっついのを人はカリスマというのかもしれません。

一方そのころ、ジャック隊はというと。

「ディーッ！ ねえディーはどこディーうわああディーッッ！ ディー僕怖いよこの人達みんなこつくて怖いよ！ いかついよ！ むさくるしいよ！ 帰りたいよ！」

「た、隊長！ この子、さっさからずつとこの調子なんですけど！」

「一発殴らせてください！ 気絶させて連れて行けばいいじゃないですか！」

ジャック隊が任されたのは双子の片割れ、ダムこと純志くんは、車に乗ってからず

「とっ」怖いとか『デー』とかわめき散らしていたようです。部下達は完全に滅入ってしまってます。なんだかもう任務が失敗しそうな予感がピンバシしてきました。

「耐える、トワイセ、セベンス。こんなことで音を上げていたら、無鉄砲で我がままなその場のノリで生きてる子供みたいな上司を持った時に大変だぞ？」

「それ、エースさんのことですよね……」

そのエースさんは、ただ今絶賛子供に遊ばれています。

「うっうっうねえいつになったら着くの!? 早くデーにあわせてよ! 僕デーがないと何でもかんでも全部全部怖くて仕方ないんだよあ! ああほら今木の枝にリスが! 目があっちゃったどうしよう! 絶対あれいつかの悪言の生まれ変わりだよ! 一つ殺してやるうかつて僕のこと見てたんだよ! 寝てる間に噛み殺しに来るかもしれないよどどうしよう! 助けて軍人さん!」

「お前は普通にリスかわいって言う思考回路は持っていないのか! 少し黙れ!」

「うわあああ軍人さん怖いよ! 今悪言がもわああつて! もわあああつて出たよ! 絶対出たよ! あああ、それがいっぱい集まって僕は殺されちゃうんだああああいやだあああ最初にデーに会いたい! ねえいつになったら着くの!？」

被害妄想の山手線ゲームです。子供の想像力は計り知れませんが、はい、うざいです。

しかし、そんな状況でもジャックさんはいたって冷静。

「セベンス、うるさい子供を相手にする時はテキストに受け答えしてればいいんだよ」

「それ、エースさん相手にしてる時の隊長ですよね……」

エースさん、ご愁傷様です。

そんなエース隊に負けず劣らず賑やかなジャック隊に、突然無線が送られてきた。

「隊長、エース隊から無線です」

『きよだ……こが……つて……大変……早く……ジュン……ッッ!』

届いた無線はノイズが酷く聞き取りづらいものですが、破壊音と銃声、エースさ

んの緊迫した声から、ピンチに陥っていることは、簡単に想像がつかました。

「ッ!? エース! 今何処にいる!？」

『……オル……え……ベイ……ン……ッ! ……ヤック早くッ!』

ブツ

エースさんの必死な叫びを最後に無線は途絶え、車内にはノイズばかりが響くだけとなった。ど、どうしよう……ッ! いやな予感の中です!

「くっそ、エース! 何やってんだッ!」

「た、助けに行こうにも場所がわからないんじゃ……」

「僕にまかせて」

部下 トワイセさんの言葉を遮り、わめくばかりだった純志くんが言いました。

「そのエースつて人を探せば、デーに会えるんだよね? なら、僕がやる」

結局はデー目当てのようですが、どこか頼りになりそうな雰囲気をもし出す純志くんは、返事も聞かずに、車の窓から身を乗り出し、何か小さく呟きました。

すると突然、窓の外がペンキでも塗ったかのような「黒」に包まれてしまいました!

目を凝らすと、闇の中に無数の目が浮かんでいます。この禍々しい瞳は……

「……悪言……ッ!？」

「ええ、い、いったいどうなってッ!？」

そんな驚きももつかの間、大量の悪言が一瞬にして消え去ってしまいました。

何が起こったんでしょう……? さっぱりです。説明きほんぬ。

一方で、純志は何事もなかったかのように席に戻って、言いました。

「ベイジン、プーオル手前の山道。そこにデー……と、エースさんはいます!」

「お前、どうやって……!? それにさっきの悪言はッ!？」

「そんなことより、早く! デーが! ……あ、あとエースさんが!」

本当はデーの方しか見えていないのがモロバレの純志くん。薄情です。

そんなことも構わず、ジャックさんは静かにつなずき、アクセルを力強く踏みまし
た。エンジン音が高らかに響いた。

「隊長、どうなってるんですか!? 何で、巨大悪言がこんなところにいるんです
か!? プールで足止めしていたんじゃないんですか!?」

「そのはずだったんすけどねえ! あーもうなんなんすかこいつツ!

プールで二人とは別のフェイス、クインさんとキングさんが足止めしていたは
ずの巨大悪言。それが突然、エース隊に襲い掛かってきていたのです!

今回は秘密兵器こと闘詞と純志を目的地へ運ぶという簡単な任務だったので、乗員
はエースと部下 部下 という申し訳程度の戦力しかありません。そこへ、軍の全勢
力を送り込んだクイン・キング隊をも退けた巨大悪言が襲ってきたとあってはひと
たまりもありません!完全に劣勢、どこるか絶体絶命の危機です!

「闘詞! あんた、巨大悪言なんてささと退治できるんすよねえ!? そんなとこ
ろで突っ立ってないで、手伝えっス! このチビ! での坊!」

「残念、俺はダムと一緒にじゃなきゃ戦えないんだよ。それくらい分かんないのぉ?」
はっ、と鼻で笑う闘詞くん。やる気のみならず、危機感も連帯感もゼロです。

「あああ、もうこんな時までムカつく奴っスね! 《万の兵、突撃》!」
ダダダダダダダダダダ!

高らかな銃声と勢いよく発射される言弾も、全長五メートルはゆうにある巨大悪言
相手にはまるで効果がありません。無線も壊れ、闘詞も使えません。

もつこのまま戦っても全滅だというのに、エースさんは撤退の指示を一向に出そつ
としません。どうしたんでしょう。これには闘詞くんも焦ったように叫びます。

「ばっか! お前等! 言弾で空間移動くらい出来ンだろ!? さつさと退けよ!」

「この先には小さな村があるんす! このまま俺達が退けば悪言に襲われること間違
いなしっスよ! だから、意地でも、俺達は退くわけにはいかないんすよ!」

それが大陸治安維持軍なのだから。
そう、下手をしたら命を落とすことになるような場面で、エースは言った。

今までのあれこれも吹っ飛ばぐらい、カッコいいです。銃を構える背中がまぶしい。
「ほんと、馬鹿だろつお前等! 馬鹿! 馬鹿馬鹿! この馬鹿ツ!」

「馬鹿で結構! その程度の暴言ならジャックので足りて…… ツ!?」
その時でした。

悪言の鋭い爪が木々を切り裂き、
鋭く尖った木片が一直線にエースさんへと…

ああ、死ぬなあ
そうエースさんが思い、目を閉じて…

「隊長が真っ先に戦線離脱とか、かっこわるう」
闘詞の声がして、エースさんは目を開けた。傷も痛みもない。まだ生きている!

しかし、エースさんを貫くはずだった木片は、庇うように覆いかぶさっていた闘詞
くんの小さな身体に容赦なく突き刺さっていました。

さつき、あれだけ馬鹿馬鹿と罵っていたのに、エースさんを庇っていたのです。
「と、とつ…」

「ぶ、年下の子供に助けられてやんの。あんだけ言っついてこれかよ? ショボ」
変わらない軽口。しかし、傷口からはじみ出た血は、確実に闘詞の服を赤く染め
上げていきます。その様子に、エースさんは顔面蒼白です。

「あんた…、何やってんすか? 俺の代わりにそんな…!?!」
「は、何調子乗ってるの? 別にお前のためじゃねえし。こんなのどうやってことない。

じいじいん。闘詞くんが珍しく素直です。イイ子です。貴重です。レアです。単純なエースさんは感動のあまり、全力で闘詞くんを抱きつきました。ガシィ！

「よしよしイイコッスね、闘詞ッ！ ありがとっス、闘詞！」

「うるせえうぜえこつちよんなッ！ 触るな！ キモイウザい死ねッ！」

そして、ぶん殴られるエースさん。予定調和。

闘詞くんのイイ子モードは一瞬にして終わりました。

しかし、なにはともあれ、これで任務完了。色々ありましたが一件落着です。

何かとムカつく双子でしたけど、終わりよければ全てよしです。まあ、暴言も騒音も水に流してあげましょう。それが大人の寛容さです。

「よし、闘詞、純志、帰るぞ」

そんな和やかムードで話は終わるはずが、

「いやだ」

「は？」

気持ちいいくらいに即答でした。当たり前のように帰宅を拒否です。

「ここにきて、お子様スキル、わがまま発動！」

「だって、帰ったらどうせまたダムと離れ離れだしー」

「危ないからってつかまつちゃうしー」

「俺達まだまだ暴れたりないしー」

「何よりもっと一緒に遊んでいたいしー！」

そついうと双子は、木の上へと飛び上がり、楽しげに叫んだ。

「隊長さんー あそびましょー！」

と、双子の掛け声に大量の悪言が現れ、一斉にジャックとエースに襲い掛かってき

た。援護しようとした部下達は、すかさず悪言に縛り上げられてしまいました。というわけで、第二ラウンド突入！ まさかの二連戦です。

エースさんとジャックさんは言葉を唱えながら必死に悪言を退治していきますが、次から次へと現れてキリがありません。エースさんは体力も限界です。

そんな二人を尻目に、双子は歌とも言えぬ詩を謡っています。

「むかしむかし ちよつとだけむかし！」

「不幸な双子がありました！」

「家も 親も 何も無い！ 生きる術すら 分からない！」

「そんな双子がありました！」

「双子はやがて力尽き 倒れて着いた 不死戯の国！」

「「こなら 一緒！ いつでも一緒！」

「僕らは一人！ 二人で一人！」

「俺が 踊って 壊して 晒して！」

「僕が 歌って 崩して 泣いて！」

「僕らは双子！ 不死戯の国のデイドルデーとデイドルダム！」

仲良く謡って、木の上でぐるぐる踊る双子。それに合わせて、悪言も狂狂踊るよう

に襲ってきます。二人を道中で引き合わせてはいけないのは、こんな風に、歯止めが

利かなくなるからだったのです！ まるでロケット砲！

「な、なんなんスカあ？！ もう任務は終わったんスよ、帰るっスよ！」

「やなことだ！ だって、そつしたらもうエースと会えないだろ…？」

「と、闘詞…ッ！」

「なんちゃってーッ！ わーいひっかかってやんのー！ は、超間抜け面！」

カチン

エースの いかりの ボルテージ があがった

「純志！ 鬪詞と話す時間ならいくらでもやる！ だから帰るぞ！」

「いやだいやだいやーだッ！ もっと僕遊びたいもん！ 車の中じゃ、ジャックさん相手してくれないんだもん！ つまんないつまんないッ！ やだやだーッ！」

カチン

ジャックの いかりの ボルテージ があがった

「いいじゃん別にちよっとくらいさーッ！ たいしたことでもないじゃんか！」

「そつだよそつだよ！ 僕らがんばったんだしー！ 少しくらい遊んでくれても！」

あまりのわがまま具合に、二人の怒りのボルテージがみるみるあがっていく。

いつも仏頂面のジャックさんは顔には引きつった笑みを浮かべ、ブルブルしている。レアとか通り越して怖いです。横で、悪言に捉えられている部下が蒼くなっています。

一方、エースさんというと、笑顔にさよならグッバイ、黒エース様が降臨なさっていた。口の端をゆがめて、笑顔とは程遠い凶悪な表情になっている。

二人ともキャラ崩壊寸前です。ああ、あともう一押ししたら完全に…

「何 どうした？ 降参！？ えー、そりゃないよー期待裏切んなしいーナイわー」

「えー！ なんて突つ立つてんの！？ ちよっと！ 遊んでよ！ 遊んで遊んで！」

あ、

ブチン

堪忍袋とか血管とか、切れちゃいけないものが切れた音がした。

ぐっばい、理性。

「こんのがきやああああああああああああッッー！」

二人は叫びながら、怒りのままにアサルトライフルの引き金を引いた。

「《KY》(殺してやる)《KY》(殺してやる)《AKY》(あいつ必ず八つ裂きにする)「！

「《MKY》(マジでこいつら許せない)《SKY》(好き勝手やりやがって)「！

「《KYKK》(切り刻んでやるよこの糞餓鬼)「ッッー！」
バラバラバラバラバラバラバラバラバラッ！

さつきまでとは比べ物にならないほど、殺傷力と殺気を含んだ言葉が悪言を次々と

打ち抜いていく。大量にいた悪言はあつという間に霧散していく。言葉は元となる言葉の力が強ければ強いほど威力をますのです。例えばソレが負のエネルギーでも。

「え、ええ！？ 何これどうなってんだよッ！？ え、エースッ！？」

「ちよ、ちよっと、隊長さん！ おおおお落ちていてはッ！」

「これが落ち着いていられるかってんだよッ！ お前等人がごんだけ我慢してたと思つてんだよ！ 任務のためだと思つて殴りたいのを超抑えてたんだぞチキシヨウ！」

「それなのに手前らと言つたら『いやだあもつと遊びたい』とか抜かしやがってなめてんのかアアッ！？ 大人が優しいからつて調子に乗つてんじゃねえぞ餓鬼ッ！」

「死にさらせ！」

「消えろッ！」

いつものエースさんや、ジャックさんの姿からは想像も出来ないような、無駄に息の合った罵詈雑言。怒りの引き金引きつばなし。罵倒のマシンガントーク。

「《AC》(あいつ等調子のりやがって)《NW》(なめんなよ、悪餓鬼ども)「！

「《KB》(こいつ馬鹿にしゃがって)「ッ！《AY》(あいてしてやるつじやねえ)「！

「《FK》(ぶざけんな、カス)《GJ》(軍の仕事の邪魔すんな)「ッー！」

「《HK》(人の言うことはよく聞け)《WK》(分かったか、糞餓鬼ども)「ッー！」
絶え間なく響く銃声と恨みつらみがつまった言葉。もつ盾となる悪言はとういになくなり、激しい銃撃の中、双子は泣きながら叫ぶしかなかった。

「つわああごめん本当にごめん調子にのつたああッ！ だからもつやめてよエー

ス！ 俺、馬鹿で単純なエースの方が好きだよおおおおッー！」

「わああああごめんなさい本当にごめんなさい！ お願だから許してえええ！ クールだけ優しいジャックに戻ってええええッ！」

「分かればよろしい！」

「ごめんなさいは!?!」

「ごめんなやごー!」

ぺこーっと双子は素直に頭を下げた。もう怖い。この二人怖い。ガクブルである。

そんな双子を見たエースさんとジャックさんは、銃を下ろし、

「そつそつ、子供はちゃんと大人の言っことを聞くンスよ！」

「素直に謝れば、ちゃんと許してもらえるんだからな」

と、諭した。いつもの馬鹿でクールな二人にもどってしまいました。大人は切り替えと

はじめが大切なのです。これ、社会を上手く渡っていくコツ。

「ごめんなさい！ このお詫びはいつかするからさッ！」

「ま、またいつが大変なことがあったら、え、遠慮しないで呼んでねっ！」

「もつ、そんなに怖がらないで！ 普通にしていっすよ？」

「そつとも、もう怒ってなんかないからさ」

無理無理、そんなの無理だから！ 双子だけでなく、横で見ていた部下までもが青

ざめた顔で首を振った。見たくない一面を知ってしまった…。知らぬが仏でした…

「さあ、みんな！ 帰ってごはん食べるっすよあー！」

と、エースが元気よく声をかけると、

『ギイイイイイイイイ！』

遠くから悪言の叫び声が聞こえた。それも、すごく大きな。

「あれ？ なんスか、これ？ 巨大悪言はさつき間詞達が倒したんスよね？」

「…た、隊長、さつきから、ずつと言おつと思ってたんですけど…」

「びっしした、トワイセ」

「ここ、プールの近くだから。あんまり悪口ばかり言つと、巨大悪言が…」

あ、そういえばそんなことも 言っていた ような ……

森の向こうに、さつきよりも巨大な悪言の姿が見えた。さて、早速出番ですね。

「純志、間詞。ごはんの時間だッ！」

「イェッサーッ！」

双子は元気に返事をする、勢いよく悪言の元へと跳んでいった。

その後、純志と間詞、二人の悪言人形は軍に引き取られ、それぞれエース隊 ジャ

ック隊に配属されました。今までチームで軟禁されていた彼等は、働く場所と仲間、

ゲットしてとつてもハッピー。今日も楽しく悪言を食べているっさ。

めでたし、めでたし。

そういえば、この物語の主人公の本名を明かしてはいませんかでしたね。

エースこと、大陸治安維持軍、第一フェイス隊長、悼疾風。

ジャックこと、大陸治安維持軍、第二フェイス隊長、弔祇墓守。

この二人はやがて、各々理想の女性と結婚し、息子を一人ずつ授かります。

その息子達が問題児になったり、別の双子に振り回されることになるのは、

また別のお話。

《Next gener at | on...》